



日比谷公園 緑と水の市民カレッジ講座 R5 後期

これからの公園とまち 講座レポート

「まちづくりにおいて公園をどう活かすべきか」というテーマで、
2名の講師をお招きし、国内外の最新事例を講義形式でご紹介いただきました。
事例の紹介後には、公園を活かしたまちづくりにおけるポイントについて
クロストークと質疑応答を行いました。



実施日時 | 2023年10月12日（木）18:30～20:30

実施場所 | 日比谷公園 緑と水の市民カレッジ2階講習室

主催 | 公益財団法人 東京都公園協会

当日プログラム |

講義1

公園とまちをつなぐには？ 東京農業大学 地域環境科学部造園科学科 准教授 福岡 孝則氏

講義2

公園を育てるころみ 一般社団法人 リバブルシティ イニシアティブ 理事 村上 豪英氏

福岡氏×村上氏クロストーク



講義 1

公園とまちをつなぐには？

東京農業大学 地域環境科学部造園科学科 准教授 福岡 孝則氏



“オープンスペースから都市を再編集する”ことをめざし、どのように公園とまちをつなぐことができるか、2つの観点・11の視座から国内外の様々な事例や研究に関するお話を伺いました。

1. 都市戦略と枠組み（統括・振付・社会課題解決）

① オープンスペースのネットワークをつくる

ボストンでは、1880年代にフレデリック・ロー・オルムステッドにより、河川と池や小川等の未利用地をつなげ「エメラルド・ネックレス」と呼ばれるネットワークをつくりました。シアトルでも、1970年代にローレンス・ハルプリンにより、高速道路で分断された市街地を立体公園でつなぎ「Freeway Park」として大規模な公共空間を生み出しました。いずれも今では都市の一機能となっています。

例えば、こちらは仙台における「せんだいセントラルパーク」のコンセプト図です。広瀬川流域を中心とした市民生活の中核拠点を形成しています。

② 多機能化

公園の持っている力を引き出すためにどのように多機能化するかが重要となります。例えば、自然の水循環の持つ蒸発散・浸透・貯留などの機能を模倣した手法を組み合わせることにより、人工的な都市環境下にあっても健全な水循環の回復に貢献できます。

例えば、ニューヨークのウォーターフロントパークでは、水辺の湿地が堤防となり海面上昇に適応しています。

③ ウォークブルシティ

シアトルのウォーターフロントでは、高架式高速道の地下化という都市開発に伴い、約3.2kmのパブリックスペースが生み出され、ウォークブルな都市のネットワークの基盤が再構築されました。

ロンドン市交通局の施策である「ヘルシーストリートフォーロンドン」では、人々の健康や環境改善など、より安全で快適なまちづくりに貢献することを目的に、誰もが歩きやすい居心地がよい空間を創出しています。

南町田グランベリーパークでは、上位計画として回遊軸の計画をつくることで、公有地と民有地の官民融合敷地をつくり、

まちなかの分断を解消しました。道路の再配置により、まちと公園をシームレスにつなげ、人々が散歩やランニングを楽しむ空間を実現しています。公園・旧道路・民地を統合的に再編し、歩きやすく居心地の良い空間となっています。



©長村佳子

④ ハイパーウォークブルシティ

現在、大学院の演習で、鎌倉市を対象に、まちなかの歩きやすさだけでなく、自然の中道への接続も含めた包括的な視点からのデザインにも取り組んでいます。鎌倉では、15分歩くと緑や自然へアクセスでき、まちと谷戸の地形と神社仏閣等がシームレスにつながっています。観光と住民の干渉などの交通面の課題はありますが、少し歩くと低山帯に接続し、ウォークブルを広い視点で捉えると都心ではできない面白さがあると考えています。このような観点からも、公園とまちをつなぐことは考えることができます。

⑤ PARK DISTRICT（公園街区）

今ある駐車場をオープンスペースに変換するなど、より価値があるものに転換していく考え方です。

デトロイトの中心市街地のBIZ(Business Improvement zone)では、ゾーン内の企業からの参加費で公共空間の振付(マネジメント)を考えています。例えば、駐車場空間の暫定使用、都市農地で作った野菜を提供するレストラン運営、などが行われています。



デトロイトのBIZにある都市農地

また、ロンドンのVictoria BIDでは、グリーンインフラの取組みが位置付けられています。エリア内の企業が収めた税金が公共空間整備に還元され、環境保全効果の可視化など踏み込んだ取組みがされています。

2. 場所のデザイン・マネジメント（実装）

⑥ 公園とまちの接点

まず、公園の入口のつくり方が重要と考えています。例えば、神戸の東遊園地の入口では、まちから公園が、公園からまちが見えるような工夫がされています。

南町田グランベリーパークに隣接する鶴間公園では、大きな入口から地域の入口まで、大小様々なパターンの入口を再編成しています。これにより、公園内の人の流れや動線に大きく影響を与えています。

⑦ 動線一人の流れのデザイン

動線というのは、ただ人が流れるということではなく、走る・歩く・佇む・休む等の様々な過ごし方の視点と、アクティブに公園の動きをつくる視点があります。

南町田グランベリーパークでは、商業施設から少し見下げると公園が見える設計となっており、その間は階段やスロープでアクセスしやすく流れを作り出しています。

また、鶴間公園では、アクティブデザインを核に、様々な人にとってハードルが低く毎日からだを動かしたくなる運動公園となっています。例えば、隣接する川との間にスロープを設け川沿いを走る自転車が公園に立ち寄りやすくなり、サッカーコートの外周を走れるようにすることで、競技の違うスポーツが互いに見る／見られるしかけ等が作られています。さらに、スポーツ空間以外の隙間で子どもが遊べる等、スポーツ以外の様々なアクティブな状態を生み出すことも重要と考えています。

ハードと併せて、ソフト面からのアプローチとしては、指定管理者による公園マネジメントにより、フィットネスやヨガ等、多様な健康・スポーツプログラムが展開されています。このように、公園にアクティブな状態を作るプログラムも重要となります。



鶴間公園の運動公園と川との接続

© 福岡孝則

⑧ リビングのような居心地の良さ

まるで家のようにくつろげるような器をつくること、また先にマネジメントを予見し、バックキャストによる設計を行う必要があります。設計段階では、園内での活動や一日のスケジュールを可視化して使い手と対話しながら、気持ちよく休める場所やベンチのつくり方等を検討します。これらの配置や形も公園に様々な影響を与えます。

⑨ プログラムのキュレーション

コートヤード HIROO では、スタートアップのデザイナーショップやアートイベント等のイベントを開催し、年間を通じて民間デベロッパーが敷地内のプログラムを振り付けています。

南町田グランベリーパークでは、スノーピークが屋外空間を使って焚き火バーを主催するなど、公園と民間敷地の使い方をクロスオーバーする取組みが行われています。それを支える仕組みとして、鶴間公園(指定管理者)、グランベリーパーク(商業管理会社)、パークライフ・サイト(美術館・公共施設運営者)の3者が集まり、「みなみまちだをみんなのまちへ」という一般社団法人を設立しています。公園とまちを底地として持つことにより、時の経過において成熟や衰退をする中でどのように振りつけるか検討できることが、マネジメントの面白さだと思います。

⑩ クリエイティブな計画設計プロセス

多様な人が計画プロセスに参加することが重要です。鶴間公園では、照明や緑など、公園に係るさまざまな課題を話題にして議論するワークショップを行いました。また、計画設計が終わってからの施工期間中には、市民や周りの企業の人達が主体となり、一年かけて自分たちのやりたいことを実現するプレイスメイキングの取組みが行われました。このように、場づくりから設計に落とし込むという循環が実現し、マネジメントを行う機運醸成にもつながりました。

仙台の青葉山公園でも、歴史ある地域に対する反対運動がありましたが、地域関係者とのプレイスメイキングを基軸に計画設計に取り組みました。



鶴間公園におけるプレイスメイキングのためのワークショップ例

⑪ ラボラトリウムとしての公園

ラボラトリウムとは「実験空間」という意味です。自分の街に公園を通じて触ることが重要と考えています。

神戸市の東遊園地では、毎年社会実験を繰り返してきましたが、毎度異なるプロセスで行われ、繰り返し議論が重ねられています。さらに現在、神戸市公園緑化協会が中心となり「Living Nature Kobe」という活動が立ち上がり、公園等が作られた後にどのように緑を成長させるか、という視点から都市の花・緑のビジョンや戦略が策定されています。

このように、現場で起きていることを上流の戦略に戻す好循環が起きています。



講義 2

公園を育てるころみ

一般社団法人 リバブルシティ イニシアティブ 理事 村上 豪英氏



神戸で建築会社を経営する村上氏が取り組んできた東遊園地における取組についてご説明頂きました。プレイスメイキング社会実験から ParkPFI 事業化に至る約 10 年に及ぶ取組を通し、市民が育てる公園の在り方についてのヒントを頂きました。

1. URBAN PICNIC 東遊園地での社会実験

体験が共感をつくる

神戸市の東遊園地は、旧居留地、市役所に隣接して、まちの中心ともいえるような場所に位置する公園です。ルミナリエなど有名なイベントの時は多くの人が集まるのですが、日常時には平日休日問わず人が全然いない公園でした。当時公園の近くのマンションに住んでいたこともあって、2014 年に神戸市役所の方から、何かまちの未来のために提案がないかと求められたときに、真っ先にこの公園のことが浮かびました。コンパクトシティ神戸をウォークアブルにする上で、この公園が核となるべきで、ここを日常的に豊かに過ごせるようにすることが大事ではないかという提案をしました。

最初に話をした企画部門の方はいいねと言ってくれたのですが、いざ公園を管轄する部署の方に話をすると…打って変わってなかなか難しい反応でした。すでに多くのイベントがある中で数々のクレームを受け止めており、これ以上心配の種を増やしたくないという本音があったと思います。とはい



東遊園地における実証実験「URBAN PICNIC」

えまずはやってみようということで許可だけとって社会実験を始めたのが 2015 年。天然芝を張って、本棚が囲む小さなカフェスペースを作って運営してみました。すると普段の人がいない風景が嘘のようにすぐに人が使ってくれるようになりました。考えてみればまちの中心にある公園で周囲に通りかかる人は大勢いるわけです。その 10 人に 1 人が立ち寄るだけで相当の人が滞留する風景をつくれました。特に嬉しかったのは、最初反対していた課長さんが、取組に価値を感じてくれて、こういう風景がつけれるなら是非一緒にやっていきたいと言ってくれたことです。今思ってもこれが決定的な瞬間だったなと思います。机の上で何時間議論しても恐らく変わらなかったと思いますが、公園で豊かな日常を過ごしている市民が大勢いるという、この体験を共有できたことが協働のきっかけだったように思います。何十年も先の公園の姿の議論まではできなくとも、来年何をしようか、という議論は出来る関係性になる。このことが重要だったと思います。

社会実験の成果

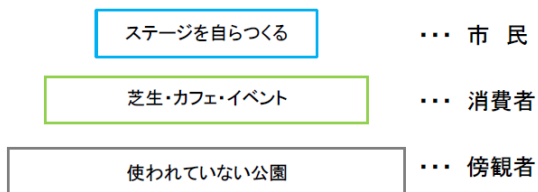


一緒に感じることから、協働が生まれる

公園を育てることにどれだけの市民が参加するか

URBAN PICNIC は最初は短期的に行いましたが、2016 年以降は半年程度の長期的に行うようになり、この中でフォーラム、演奏会、ヨガ、映画上映など、本当にいろいろなシーンをつくって試してみました。今では神戸の名物の一つとなった FARMERS MARKET の誕生に立ち会うことも出来ました。

いろいろ試してみても思ったのは、公園を育てることに関わりたいと思う市民の方は多いんだなということです。公園に芝生やカフェやイベントをやればお客さんは多く来るけれど、公園の領域はそこから半歩先があるのではないかと。公園が育ってまちが良くなる大きな流れの一部になりたいと思うような人が沢山いて、そういった活動の中でその人たちの中で市民性が育つという循環があることを実感しました。お気に入りの本を公園に持ち寄ってもらい、自由に読んでもらうという企画では、あえて1冊だけ持ってきてもらうことにしました。たった一冊だと廃品回収に出すようなものでなく、本当に思い入れがあるちょっともったいないと思うような本を持ってきてくれて、それが公園に対する愛着とか思い入れに直結していたように思います。これは何も生活者だけではありません。実験期間中、企業が公園を使用したいということもありました。小型の自転車のプロモーションを兼ねたイベントで、キックバイクの試乗やレースを行ったのですが、公園の風景としてふさわしいかどうかを考え、それに沿う形であれば問題ないだろうとことで市も含めて相談し、実施しました。



公共空間を 市民が育てる
その中で市民性が育っていく

4年にわたる社会実験を通して、公園の将来イメージが固まってきました。つくりたいのは日常を豊かに過ごせる公園ですから、イベントで一時的な集客数・来援数を増やすことを目標にするのはちょっと違う。また ParkPFI のガイドラインを見ると「カフェ」という言葉が何度も出てきて、まるでカフェをつくるのが公園の魅力に直結するように見えます。飲食事業者は飲食店経営に注力するのが当然なので、それとは少し違って、公園全体の価値を高めるような視点が必要となる。そういう事業者が必要だろうと思ったのですが、なかなか思いつくところがなかった。ならば自分達でやろうということで、ParkPFI の事業者として応募し、特定され実際の事業として取り組むこととなったのです。

2. ParkPFI 事業としての実装

社会実験の経験を元にした空間づくり

改修のポイントとして、公園内の見通しの悪さや段差を解消し、フラットで見通しの良い計画としました。また社会実験を通じて、芝生をつくと人はそこに座ったり眺めたりするという、いわば重心のようなものを感じていたので、そこを意識しました。大小2つの芝生をつくり、大きなイベントがあるときでも小さな芝生広場はイベント会場にはせず、日常的な利用者のために開放するようにしました。公募対象公園施設は中央にカフェ、南北両端にレンタルスペースを備えています。公園内のアクティビティの拠点施設として、どこにいても手を伸ばせる距離にあるように、一方で商業的な匂いを振りまきすぎないように、規模を確保しつつもインパクトを下げるためにどうすればよいかと考えました。具体的にはどこか一つの方向だけに正対するのではなく、アクティビティの中心となる3つの広場(大小二つの芝生広場、マルシェなどを行うみちひろば)に正対する形状としています。



東遊園地 園内図

新しい PlaceMaking

いざ公園がオープンしてみると自分達でも信じられないくらい多くの方が公園に集まりました。これまでやってきた、土日の昼に人を集めるような PlaceMaking はもはや不要なので、改めて考えを組み直し、使われていない時間帯に目を向けることにトライしています。特に夜の公共空間にはまだまだ可能性があると感じていて、ナイトピクニックという企画を月1回やっています。神戸市内の飲食業者に集まってもらって夜の公園の風景をつくるというもので、大勢が集まるイベントに成長しつつあります。また公園は緑の拠点でもあるので、宿根草を使ったナチュラルスティックランドスケープの拠点がいくつかあるのですが、そのうちの一つをグリーンコモンズとして、自分達で植栽管理運営できるボランティアスタッフを育成する取り組みをやっています。



東遊園地で進む、さまざまな PlaceMaking の取り組み例

感性を共有し、意図を共有し、必要な時間をかける

一つの主体で出来ることは限界があります。様々な関係者と協力して、仲間にならないと物事が進みません。そのためには意図を共有する必要がありますが、ただ名刺交換して意見交換するだけの意図の共有までは難しい。その間に「感性の共有」が必要だろうと思っています。冒頭の市の課長さんの例同様、同じ体験をし、同じ風景を見ることで感性が共有される。これをしているかどうかで、その後の質も変わってくるように思います。意図が共有できれば、後は必要な時間をかけることが重要です。何も10年かかる話ではありません。東遊園地で行った演奏会や映画上映も、最初は閑古鳥が鳴いていたものも、1年2年、じっくり時間をかけて続けることで多くの人に知られ、足を運んでくれるようになりました。それが東遊園地のオリジナリティを生んだと思います。短期的な成功を求めず、時間をかけることで市民が公園を育てることにつながっていくのではないのでしょうか。

福岡氏×村上氏 クロストーク



東遊園地のケースなどを取り上げながら、「これからの公園とまち」についてクロストークを行いました

福岡 東遊園地では、毎年実験を行うたびに成果をまとめて神戸市への報告や意見交換を行っていたのでしょうか？

村上 はい。神戸市が設置した「再整備検討委員会」があり、そこに社会実験の成果を共有しながら、今後の再整備に向けた提案も行いました。また、「東遊園地パークマネジメント社会実験検討協議会」を立ち上げて、市内のまちづくり協議会の方や有識者の方、当初から関心をもっていただいた方などの意見をいただいていたと思います。

福岡 「東遊園地を再整備する」という決断がなされた経緯について教えてください。

村上 決断の背景には2つの事情がありました。1つ目は『ルミナリエ』というイベントに集まる人の踏圧で芝生が消えてしまう課題があったので、『ルミナリエ』と芝生を共存させるためには再整備が必要だったということ。2つ目は、2015年頃から神戸の都心に投資をするムーブメントが醸成されつつあったことです。これら事情と、我々の社会実験の実施時期が重なり、再整備の決断がなされたと思われる。

福岡 これまでの社会実験や取組の中で課題になったことはありますか？

村上 自然への対応は課題でした。例えば風雨時には音楽イベントの開催は難しくなるので、シェイドの必要性を感じました。社会実験で課題だらけでしたが、課題解決策を含めて設計に活かしてもらえたのは良かったと思います。

福岡 社会実験を踏まえて、空間やプログラムに反映されているものとして、どのようなものがありますか？

村上 「どのような場所に人々は座るのか」「注意事項として知らせるべきことは何か」などについては、社会実験の経験を踏まえて、設計やプログラムに反映したものです。

福岡 社会実験で設置したパビリオンは、どのような思想やプロセスで設計したのでしょうか？

村上 いろいろなパターンを試しましたが、例えば単管パイプを使ってパビリオンを設置した際には「ごみを極力減らす」ということを意識しました。また、パビリオンのような構築物を、芝生広場のような人々の活動の重心となる場所にどのように向き合わせるべきか？については、社会実験から学びました。構築物と広場の関係をつくることは大切ですが、あまり大きな構築物を広場に正対させると、広場が構築物の前

庭のようになってしまいます。人が主役の公園においては、人々の活動の場を中心にした計画が必要と感じました。

福岡 神戸市役所のどのような部署の方々と連携されたのでしょうか？

村上 当初は企画調整局や都市局の方々と連携していましたが、徐々に建設局公園部の方との連携が深くなってきました。公園部の方々は日々、公園を勝手に私的に占有してしまう方などへの対応もなされており、最初は警戒されましたが、社会実験を経て、次第に協力をしていただけるようになりました。公園を管理する立場だけでなく、「自分たちが取組んでいる大切な公園やコト」として、よりカジュアルに参画・協力していただけるようになったのではないかと思います。

市役所の中には、「民間が利益のために公園を使うのではないか？」との疑念を抱く方もいたかと思いますが、「民間が公共的な視点を持って公園を使う」ことを、社会実験を通じて理解していただくことで、前に進められたのだと思います。

福岡 同時期に公園の再整備、公募対象公園施設の整備、フラワーロードの再整備が進められていましたが、どのように調整をしていったのでしょうか？

村上 「どのようなまちを目指すのか？そのためにどのような公園や施設があるべきか？」を軸に、社会実験や計画を進めてきました。「公園が良くなっていくことで、まちが良くなっていく」という目標・ビジョンは共有ができていたので、細かな調整はスムーズでした。

東遊園地を目的地にしてこのまちを訪れてくれる人も増えていますが、それは、皆さんが「都心のまちにある公園」に求めていたことを実現できたからではないかと思います。社会実験を重ねていくことにより、人々が潜在的に求めていたことを確認し、「こちらの方が良い」という見直しも繰り返したことで実現できたのだと思います。

福岡 公園を設計する際には、パースや模型をつくりながら将来像を想定しますが、まちにフィットする公園づくりのためには、どのようなことが必要なのでしょうか？

村上 例えば「このイベントは無い方が良い」といったこともすり合わせる事が重要だと思います。公園で実施することに違和感を覚えるイベントというのは共有しやすいです。

休日に公園でゆっくり過ごしたい人の立場に立つと、公園で集客イベントを行うことには違和感を覚えます。イベントが実施されるごとに「このイベントによって公園の価値が上がったのか？下がったのか？」を常に考えるようにしています。公園の価値については相当議論をしました。

福岡 社会実験から再整備へと段階が進み日常的な賑わいが生み出された中で、元々社会実験に関わっていたような人々は今後どのように公園に関わっていくのが良いのでしょうか？

村上 「人々が公園に関わるきっかけをつくる」ことは最もコストをかけるべきポイントだと考えています。例えば、まちなかの公共空間である公園では、社会の課題にコミットできるような仕掛けが必要かもしれません。また、緑や癒しを

求めて公園に来る人に向けて実施すべき事も考えなくてはなりません。

福岡 東遊園地の再整備によって、神戸都心部における人々の活動のコアができたと思いますが、今後その効果をエリアに広げていくために、「公園とまちの繋がり」をどのようにつくっていけば良いと思いますか？

村上 「人と人の繋がり」がまちをつくっていると思います。また、公共空間だから繋がれる人々がいると思います。公共空間の良さは、老若男女問わず同じ空間で笑い合え、繋がりや幸せを可視化できることです。公園とまちを物理的に繋げることも大切ですが、まずは公共空間を通じて、人と人が繋がることが出来るようにしていくことが大切ではないでしょうか。

質疑応答

講座に参加されている方から福岡氏と村上氏に対する質疑応答を行いました。

質問者 A 植物が持つ力について感じていることはありますか？

村上 同じ神戸の中でも三宮駅前と公園では人々が求めているスピードが違うと思います。公園の植物が、静けさや落ち着きをもたらしてくれる力は感じています。一方で都心の駅前では、多少の植物を持ち込んでも効果は限られるので、公園とは異なったアプローチが必要になってくるのではないかと思います。

質問者 B 公園はインフラとしての土台の上に[どれだけの人々が関わるか]でオリジナリティが生まれると感じました。公園それぞれにオリジナリティを持たせるためには、どのようにしたら良いと思いますか？

村上 柔らかく考えることを繰り返す実験的な進め方をすることも良いと思います。そのなかで、芽生えてくることを共有していくことが大切だと思います。

福岡 市民と行政それぞれに、公園に対して見えていること・見えていないことがあると思います。ビジョンやプランをつくっていく上では、これらを認識・共有しながら、それぞれの公園に相応しい個性について、時間をかけて議論をしていくことが必要ではないでしょうか。

